



TITLE:

絶對國家

AUTHOR(S):

作田, 莊一

CITATION:

作田, 莊一. 絶對國家. 經濟論叢 1938, 46(1): 16-31

ISSUE DATE:

1938-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131049>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 一 號 第 四 十 六 卷

昭和十三年一月一日發行

新年特別號

資本主義と戦争	文學博士 高田保馬
絶對國家	經濟學博士 作田莊一
農地自治管理論	經濟學博士 八木芳之助
ナチス主義と經濟的自己責任の原則	經濟學士 中川與之助
工場内住居施設に就いて	經濟學士 大塚一朗
シュモラーの國民經濟學方法論	經濟學士 白杉庄一郎
重農派租稅論の基礎問題	經濟學士 島 恭 彦
國際收支均衡の理論	經濟學士 松 井 清
近代地代理論について	經濟學士 山岡亮一
投資乘數の理論	經濟學士 飯田藤次
國際收支策としての輸入統制	經濟學博士 谷口吉彦
共同體の人間學的考察	經濟學博士 石川興二
新着外國經濟雜誌主要論題	

（禁 轉 載）

絶對國家

作 田 莊 一

一

曾て本誌に於いて、私は「純粹國家」と題する一論文を掲載したが、それから已に十年を經過した。その論文は學界に少しの反響をも與へなかつたやうであるが、しかし現實の動向に察すれば、我が國家は、幾多の強い反對勢力の抵抗あるにも拘らず、漸次に雜糅國家に混入せる不純分子を取り除かうとする方向をとつてゐる。私は今尙ほ舊稿の純粹國家説を保持する。但し所説の構造や表現に幾多の修正補足を要することは勿論である。

今私は更に「絶對國家」の説を提出する。國家は純粹國家と絶對國家との二方面から完全なものとなつて行く。現實の歴史的國家は雜糅國家であり且つ相對國家である。それが純粹國家に向ひ絶對國家に向ふに従つて、國家は完成に近づく。

「絶對國家」の名を挙げるとき、西洋の國家論を學べる者は直ちに十七八世紀頃歐羅巴に行はれたるアブソリュートチズムを聯想するであらうが、それとこれとは何の關聯もない。絶對無限の權力を行使する君主政治、例へば

イギリスのゼームズ一世やフランスのルイ十四世に表はれたやうな國家觀念は、十八世紀末の啓蒙思想や政治革命によつて已に消滅してゐる。我が國の歴史に於ては、アブソリューチズムの如きものが曾て現はれたことはない。それと共に英佛の政治革命の如きものも全く起り得る餘地がない。

「絶對國家」は相對國家と對照される。我々は人格を擧げて結合し無制限に生活目的を實現する組織體の中に住むのであるが、この組織體を「國」又は國民團體と言ふ。人々は古から國を成して生活し、國によつてのみ人間生活の確實なる保存と多望なる繁榮とが約束せられる。國を失つたユダヤ人でも他の民族の國に住むことによつて生活を遂げ得る。但だ最近に到つて國を連ぬる國際團體生活が始まつたが、これは國々の聯結であり、國を超えたる世界生活ではないから、國の生活が第一義的なことは依然として變らず、國際生活は國の生活を補充する第二義的の世間生活である。この國際團體が將來に於て世界國として第一義のものとなるであらうかどうかは、極めて疑問多き構想であるが、それが構想である所から今暫らく問題の外に置く。今は現實の國に就て考へる。現實の歴史に見られる國は、人々がこゝに生れこゝに死し、これなくば生活なしと言ひ得る組織體であるが、この組織體は近世以來は二つの相違せる構成層を持つ。一は人々が共同參與の關係に於て同一の生活目的を實現する全體の組織であり、他は人々が相互依頼の關係に於て各別の生活目的を實現する集團の組織である。前者を國家と名づけ、後者を社會と名づける。國の構造に於て國家が社會と對立してゐる場合は、その國家を相對國家と言ひ、社會が解消されて國家のみが國となつて來た場合は、その國家を絶對國家と呼ぶ。この用語は或は適切でないかも知れないが、名稱よりもその意味を念頭に置いて本文を讀んで頂きたい。

二

我等が「くに」と言ふときは、一面では神の治め給へる形而上世界が君の治め給へる形象世界に顯現せるものを指し、他面では人々が一致團結して全體を成し制限なく生活目的を實現する組織體を指す。前者は「みくに」と呼ばれ、「我が國」と言ふときは後者を指す。支那で「國」と言ふときは初めから領域を持つ共同生活組織を意味し、歐羅巴語のステート等は權力團體の意味を含んでゐる。我が國では漢語の「國家」が我が大家族的な國を表現するに適する所から、「國」と「國家」との二語を取入れて殆どこれを同様の意味に用ゐた。支那では理想に反し「家」から「國」へと伸びないで寧ろ「家」から「個人」に向ひ、「家」は依然として保持されるも個性を帶びて國の固成を妨げた。日本では國が先づ確定してそれから家が派生し、家は國の構成分たる小全體である所から、國と言つても國家と言つてもさまで相違ない用例となつた。憲法に「國の元首」とあり、詔勅に「國家の隆昌」とある場合にも、共に大君を中心と仰ぎ、我等御民が億兆一心となつて働くべき全體の組織體を指すのである。西洋の近代科學を學べる人々は、國家の語にステートの意味を付し、國家とは權力團體なりと言ふが、これは恰も紋付羽織と言ふとき、これをモーニングコートと解するやうな可笑味を感じしめる。

國は最初から民族を實質とする全一的組織體として現はれてゐる。そこでは全體生活目的の實現が主となつてゐるが、未だ明かに各個目的の實現と區別される全體目的の實現とは言へない。そこには後代に發展せる個性が未發のまゝに含まれて居り、これが次第に部族・氏族・閥族等の形態をとつて現はれ、こゝに國の中央統治に對

立して一種の分立自治を行ふやうになる。分立自治が次第に勢力を増して中央統治を牽制するに到れば、國の生活は二面的となり、殊に二者の衝突せる場合には二元的にさへ見えて来る。封建組織は更にこの情勢を強化せるものである。斯くなれば國の生活の中に、全體目的を實現する方面と自治體の各別目的を實現する方面とがやゝ容貌を示して来る。この中、前者は古來の國の傳統を受けるものであつて、これを狹義の國家と呼ぶならば、後者は國家と對立する別の存在と見られる。こゝに已に國家の相對性が看取される。但し分立自治はもと國の統治より派生せるものであり、また自治體は團體生活體であり、更にまたこれらの生活體の間には相互の交渉が成立してゐない所は、後代に現はれる社會生活と著しく趣を異にする。

次で封建組織が終末に近づくに従ひ、新たに國家と對立する勢力が生れて來た。古代の分立自治體は次第に分解されて大中小の家族となり、遂に個人に到つて不可分態に達する。封建期の末に家族又は個人が生活單位となるとときには、同時にそれらが相互依頼の關係に入つて各個生活の連鎖を作るやうになる。それが即ち近代の社會である。社會の發展は、西洋にあつては早くもギリシャ・ローマに見るべきものがあつたが、これらが減んだ後には、新たに近世歐羅巴の諸國民に近代社會の發展を見るに到つた。これは主としてヒューマニズムと交換經濟との合作であり、近代人が發見した社會と言ふはこの社會である。支那に於ては早く封建組織が崩壞して後に、家を單位とする社會が發展し、國家の弱きだけ社會が強く成長した。我が國の社會は徳川期の統制的封建組織の下に交換經濟が發展せると共に全國的に成長し、明治以後に於て西洋の社會的産業組織及び社會思想を移入するに及んで今日見るが如き成熟期に達したのである。

社會が成長するにつれて、人々は生活目的のあるものを全體目的から各個目的に移し、新しく生ずる生活目的を各個生活に取入れ、個人の相互依頼の關係に於てこれを實現するやうになつた。その中にも最も重要なものは財貨の生産・消費及び流通である。かくて古代の分立自治の團體生活に代つて成長せる社會生活は、前者が數多分立して國家に對すると異り、唯一つの集團組織となつて國家と對立するに到つた。この時、相對國家の地位が明瞭となり、人々は國家と社會とを並び稱し相對せしめて見るやうになつた。尤も二者は對立すると言ひながらも、國家は社會を統制し、これによつて國の生活を統一してゐるが、しかし國家の力を以て社會の存在を左右するまでには到らない。社會は國家の地盤の上に發生したものであるが、而かもそれ自ら發生し成長し來つたものであり、統制を受けるも統合さるゝことなく、全體目的を實現する國家と並んで各個目的を實現する所の獨自の存在を示してゐる。但し古代の分派團體生活は一種の自治であり、近代の社會にも地方又は組合の自治が出現したが、社會そのものは意識なく志向なき自然の機構であり自然の運動をなす。従つて國家の社會への統制も、目に見える所は國の統一に導かれるが、目に見えぬ場面に於ては寧ろ國の統一を破るほどに廣大且つ深刻なる社會の運動を起してゐる。

三

現代に於ては國家と社會との對立が次第に深刻味を帯びて來た。殊に社會に經濟階級の對立を生じ、これが國家の組織内に浸み込んで國家を不純化するに及んでは、全體目的を實現する國家を衰弱せしめ、國家の實質をなせる民族の結束をさへ弛緩せしめるに到つた。かくて國家と社會とを代表して民族と階級とが世間生活の二重點

をなすかの觀さへある。我等は全體目的の實現と各個目的の實現との對立關係の中に置かれ、一面には國家人として自己を空ふして働き、他面には社會人として自己に執着して働く。各人は全體の分身であると同時に集團をなせる個人であり、世間が二面に分たれると同様に各人もまた二面の生活を營む。然らばこの矛盾せる對立は果して如何に成行くであらうか。こゝに考へられる場合が四つある。(一)は國家と社會との對立が永續すると見ること、(二)は國家と社會との對立が止揚せられて第三の矛盾なき世間生活の境涯に進み出ると見ること、(三)は社會が主となつて國家を強く牽制し、やがて國家を社會の中に吸収し解消せしめると見ること、(四)は國家が主となつて社會を嚴しく統制し、やがて社會を國家の中に吸収し解消せしめると見ることである。今一々これらを吟味して見よう。

第一に、今までのやうに國家と社會との對立が永續することは、世間を客觀する沒人格的認識ならばともかく、國家人たり社會人たる我等の主觀に於ては到底長く忍び得ない桎梏である。全體目的に適する生活と各個目的に適する生活とを適當に配置するならば、この矛盾を脱し得るやうであるが、問題は抑もこの配置を何者が決定するかであり、そこにまた國家と社會との對立がある。我等は早晚二者の對立を解消しなければならぬ。

第二に、國家と社會との對立を止揚して第三の世間生活の境涯に出ると云ふ見解は、形式的辨證法による論決ならばともかく、實際に於ては何の問題解決ともならぬ。例へば個人を超えて全體に即き、全體に於て個人を生かすと言ふやうなことは、單なる觀念的辨證法の議論である。全體と個體とは存立の意義を異にするから、そのまゝでは歸一することが出来ない。歸一し得るには、全體が個體を生かし得るやうに變質するか又は個體が全

體に生き得るやうに變質するかでなければならぬ。それは結局に於て、前の場合は、全體が超個人的地位を下だして自由個人の聯合を系統付け秩序付けるだけの共同體となることであり、後の場合は、各人が個人たる半面を清算して全面的分身となり、而かもこの分身が自體性、取得することである。然るにそれは要するに第三又は第四の場合に外ならぬ。

第三に、社會が主となつて國家がその中に解消されると考へる思想は、無政府主義・共產主義の構想であり、自由主義も條件付にて社會の中に國家を吸収する構想である。而してこれらは一聯の個人至上觀の產物であり、國家を單に權力團體と見る近代科學思想の結論である。近代の社會科學によれば、國家は權力に基く法律を以て個人の行爲に強制を加へる一種の社會的機構であるとなし、社會は人々が道德によつて共存し文化を造り生活を樂しむ生活境涯であると見る。これは近代西洋の世間生活が生み出せる思想としては、やゝ首肯される所もあるが、要するに一種の構想に止まり、その構想も今や已に修正されつゝある。まして我が國の生活に於て國家と社會とを上述のやうに解することは全く甚しい謬見である。我等が盡忠報國と言ふとき、その國又は國家が權力を主たる特徴とする存在であらうとは夢にも考へて居らぬ。その國民思想こそ迷信であると考へる人々は西洋近代病に罹れる我慢増長の我見者流である。國家が權力を用ゆるは主として非國家的社會人を制する爲であり、社會あるが故に權力を必要とし、社會が消滅すれば權力も殆ど無用となる。國家人といへども權力を必要としない國家を要望する。それは純粹國家に於て見られる。然るに社會人は概して權力を嫌惡するが、それは權力が彼等の頭上加へられるからである。また社會生活は道德によつて營まれると言ふは、唯だ法律と道德とを概念的に區

別し、國家生活は法律によるが故に社會生活は道德によると見る小兒らしい見解であり、社會道德が精々社會聯帶や互助相愛の道に止まるに比べ、國家道德が中心に歸依して億兆相和すると言ふやうな高級のものを具ふることを知らない一知半解の短見である。更にまた文化を創造するものは、社會でもなく、社會に於てのみ行はれるのでもなく、文化創造の主體は世間人ならぬ汎人であり、それが國家又は個人を通過して世間に現はれる。この場合に個人の手による創造に比べて、國家の手になるものが遙に雄大であり、個人にとつて不可能なことが國家によつて成就し得られる。國家が強くなれば文化が萎縮すると考へることは、國家を目して個人を拘束する強制者となす謬見に基くのである。惡化せる國家の下に文化が榮えないことは勿論であるが、惡化せる社會に於てもまた同様である。同じ近代社會であつても階級對立が激化しない前とその後とに於て如何に文化の盛衰に相違あるかゞ知られる。今日、國家を輕んじ呪ひ恐れる近代的社會人は西洋及び支那よりも日本の方に多いやうである。而かもその日本の國家は外國の聖人又は哲人と言はれるものよりも更に尊い天皇を戴く國家なるを思へば、更にまた歴代の天皇が如何に文化を重んじたまへるかに思ひ到るならば、如何に日本の社會人なるものゝ中に、無自覺の徒が多いかと思ひ知られる。日本に於て文化が榮えない場合と言へば、それは國家が強いときでなく、寧ろ弱いときである。

社會は個人が相互依賴の關係に互つて各個目的を實現する世間生活の境涯である。個人が最良の性格を具へるやうになり、個人は相互に扶助し決して侵害しないやうになるならば、その時には個人間の侵害を制する爲の權力は無用となるであらう。相互競争に比べ相互扶助を提唱するクロポトキン程度の人生觀ならば、權力國家無用

論も出て来るであらう。國家は財産家をして益々財産を蓄へしめる爲の武器使用者であると考へるマルクス程度
の國家觀ならば、階級國家死滅論も首肯されるであらう。されど國家はそんな淺ましい存在ではない。最良の個人
は最良の組合を作つて平和裡に世間生活を営むであらう。それも悪くはない。されどかゝる世間はたとへ善良で
あつても小人のみが住む世界に過ぎない。國家の下に惡人が横行する有様を見て、善良なる小人は、國家さへ無
ければ、國家が憤んで居りさへすれば、人々の生活が安樂になると思ひ込んでゐるが、それでは餘りに志が小さ
過ぎるではないか。人間の志は大きい。個性を尊重し個性を完成して個人的安樂境に住むことに満足しない人々
は、決して社會生活に於て満足しない。まして沉んや大人の生活境涯たる國家が小人の生活境涯たる社會の中に
解消するであらうと考へることは、全く以て無理の沙汰である。かゝる無理を覺らないのは、もともと國家が大
人の世界であることに氣付かない無知より來るのである。かくて設問は第四に達する。即ちそれは社會を國家の
中に吸収し解消せしめて、世間生活を一義的な國家生活に向けようとする見解である。

四

社會が出現せる後は古代の國は國家と社會との二重構造に轉化する。内層には傳統的なる全一體の結合組織が
存し、外層には新たに成熟せる個人關聯の結合組織が加つてゐる。古代の國の構造の中に潜在せる、又はやゝ成
長せる後にも、國家組織及び家族組織若くは階級組織の下に嚴しく制御されて居た個人性が、自我自覺の個性化
と交換經濟に於ける相互補足の物質生活によつて、物心兩面から固成されて、そこに世間に普く個人の誕生を
見るに到つた。個人は、國家を構成する分身にとつては反指定の存在であるから、傳統的國家は國の統一を保持

する爲に個人を制御し社會を統制してゐる。然るに社會が個人の並立であり、諸個人間に自由競争が行はれる間は、この統制も有効に行はれるが、近代資本經濟が成熟し、有産者と無産者との階級對立が深刻となり、自由競争に代るに有産者の企業獨占から更に大資本家の企業管制に進むに従つて、階級的構造を持つ所の社會勢力は次第に國家威力を強く牽制するやうになつた。是に到つて國の生活に社會勢力と國家威力との二元的支配狀態を生じ、各人は二つの異なる命令に服従を餘儀なくせられ、心ある者は進退に窮する境涯に追込められる。

近代西洋の諸國の如く、國家組織に確乎不拔の根柢を缺く場合には、社會勢力は國家威力を凌ぎ、國の歴史も唯物史觀を以て見る方がよく解釋され得るほどである。かくて唯物史觀を尋ね當てたマルクスは、輕率にも國家を見限り、階級國家を媒介として共產社會に進出すると言ふ社會的自然辯證法による結論に到達した。次でこの思想は一應ロシアに實現された。然るに唯物史觀に囚はれなかつたイタリー及びドイツは敢然として社會勢力に乘ずる共產黨の活動を封じ、今や現代國家の立直ほしに渾身の努力を注ぎつゝある。ロシアも亦最近には階級國家觀念の支持し難きを感じるかの形勢を示して來た。幸に我が國には確乎不拔の國家組織を不易に保持してゐるが故に、社會が出現しても個人の増長を許さず、最近の階級對立には悩まされ居るも、これを解決する自信と底力とを具へて、今や現代國家としての國家強化に進出してゐる。但し過ぎたるは及ばざるが如く、西洋ほどに社會の増長もなく階級抗争も甚しくない所から、我が國には社會を見ないとか階級對立が存しないとか考へる樂天論もあるが、これはまた思ひ過ぎである。幾萬に上げれる國體否定犯人を出し、今尚ほその跡を絶たない有様を見れば、思半ばに過ぎるものがあらう。

社會に横行する階級的運動は飽くまでこれを撃滅しなければならぬ。されど階級なき社會は個人にとつての樂園たるに止まり、それは人生にとつてどれだけ尊嚴に値するものであらうぞ。否寧ろ個人即ち小人が閑居すれば、不善を爲し勝ちであり、自由個人の社會に於ては恐らく風變りの濁世を出現せしめるかと察せられる。國家を暫有的存在と考へるだけでも、ロシヤの世間生活は如何にも陰慘なる有様を呈示する。そこには財産階級は切下げられたが、これに代つて權勢階級が頭を擡げたではないか。マルクスの頭腦は拔群であり、レーニンの手腕は推稱するに足るが、しかし國家を冒瀆する頭腦や手腕が禍となつた。聖人にして位に居る、これを大人と言ふ、我が國は大人の治めたまふ國であると、轉向後の山鹿素行は自ら悟り他に教えてゐる。小人の住む社會を制して大人の國家が永遠に存立する所に、我が國の自體性が認められる。これを特殊性と言ふは謬りである。

然らば社會を制してその上に立つ國家の隆昌を念願するは何の故ぞ。それは畢竟、汎人生活の目的を實現するに當つて、その主體を全一體の世間生活體たらしめるにある。個人の事業經營やそれらの聯關提携を以てしては期待し得る所、略ぼ知るべきである。例へば我等が相互研究を試みて切磋琢磨しても、その到達する所は各自の知見を廣めるに過ぎない。相互研究以上に共同研究に進むときは、人々は豫期しなかつた高遠の智識を求め得て共與にその恩恵に浴するのである。學問發展の歴史は時間的に現はれたる共同研究の報告である。全體國家の業績は社會のそれに比べて量に於て巨大なるのみならず、質に於て優秀である。

個人聯關の集團たる社會は盲目であるが、分身結成の全體たる國家には見る明がある。社會勢力は時に驚くべき力強い運動をなすも、それは暴風の強さであつて、數々大衆を飢餓の荒野に迫立てる。國家の強さは意志の強さ

であり、堅忍不拔の實踐力である。國家も數々罪過を犯すが、また罪過なることを覺つて美善の道に轉向する。社會を構成する個人と國家を構成する分身との相違もまた、社會と國家との相違に準じて知ることが出来る。

我々は人生の前途を祝福する。人間は益々聰明となり力強くなつて、創造開化の大業に精進するものであると確信する。この人生の大事は、暗愚なる微弱なる個人及びそれらが提携する社會の克く堪え得る所でなく、それは聰明にして強力なる全體者の生活でなければならぬ。人生の目的は、自由でもなく平和でもなく、慈悲・仁愛・博愛でもない。人生の至上目的は大人が創造開化の大業を經營するにある。この經營の主體は國家である。人生の進歩が肯定されるならば、社會の退却と國家の優越とが肯定されなければならぬ。個人と社會とが世間から姿を沒するとき、相對國家は絕對國家に昇化する。但し現實に於て絕對國家が遠らず出現するであらうと考ふることは、今の所では構想に止まる。されど國家の社會に對する統制が確立し、國家が社會から復び攪亂される恐がないと言ふ見極めが付いたならば、その時は國家の絕對性が約束される時である。その時節到來は可能であり必定である。社會を迎へて成長しながら、後は却つてその社會に惱まされて來たのが近代國家である。決定的に社會を制し、確實に全體安立の境に達し、意識的・計畫的に全體目的の實現に進み出るものが即ち現代國家である。

五

吾人は以上の所説に於て、國家及び分身の地位を高揚すると同時に、個人及び社會の地位を甚しく低下せしめた。思ふに斯の如きは個性を尊重する近代科學及び哲學に執着する近代人にとつては甚しい侮辱の言と感ぜられるであらう。しかしこの場合に考ふべきことがある。個性尊重の意識及び感情は先づ近代の世間生活の特徴として現は

れ、この現實を學問に取入れたものが近代科學たる社會科學である。然るに今や現實の世間生活は轉向しつゝある。現代人は全體生活を目指して動きつゝある。従つて此の際に近代の學問を固執する個人主義者は恰も一時代後れて現代に取り殘された人々に外ならぬ。時代に後れたる者が當代の人々から重んぜられないと言ふことは當然のことである。吾人は個人主義を採らぬ、また個性を尊重しない。しかし個人が生れ個性が鍛へられたと言ふことは事實であつて、何人も否認するを得ない。然らば個人は何の故に現はれたるか、又何故に消えんとするのであるか。個人の始末はこれを如何に解釋すべきか。

この問題は難解であり、私は今自信ある解答を與へ得ないが、試みに次のやうに答へて見たい。概念的に言へば、個人の出現と入滅とは世間生活の全體性に於ける分化と統一との過程であらう。これを人間自覺の過程より見れば、自我の覺醒は、世間人格が分解されて狭小になるほど自覺を深め得るが故に、深き自覺を個人々格に托したものと考へられる。従つて一旦、自覺を深めたる以上はもはや個人に止まることを要しないから、自覺をそのまゝにして、これを分身に移すやうになる。そこに分身の自體性が固成する。國家と云ふ全體を構成する分身も、始めは服従・奉仕に専らであつて、自ら進んで全體に生き働かうとする自發性に乏しい。この自體性は一旦個性を通過して後に超個人的分身に達するとき確實となる。自我性には個人的自我と分身的自我との別がある。自我性は重んずべきも、それは個人的でなく分身的でなければならぬ。大楠公が「我もさように思ふなり」と述べ、乃木將軍が「御跡慕ひて我は行くなり」と歌つた場合の「我」には實に力強い自我性が表現されてゐる。これぞ分身的自我性であり、その強さは到底個人的自我性の比ではない。個人的自我は皆な弱い。更にまた思ふに、全體に

即して見れば、個人性は遠心的であり、分身性は求心的である。分身は中心を求め、全體國家を念ふも、個人は國家を忘れて遠く異郷に旅行することを好む。個人が生れる以前の分身は全體に生き働いて不満を覺えない。然るに我等の生活内容が次第に増進し複雑となるに従つて各人は在來の全體に住むことを窮屈に感じ始める。この時に已成の全體圈からはみ出して中心を遠ざかる所の旅行者個人を生ずる。されど個人は畢竟孤獨の人であつて長くは旅路に堪え得ない。この時全體は個人によつて弛められたる組織を引締めるが、そこに出來上るものは新しい生活内容を盛るに適したる一層廣大なる全體と成つて、旅行者個人の歸郷を迎へる。かくて個人は自體性の強い分身に復歸する。かく見るならば、個人的自我あるを知つて分身的自我あるを知らない個人主義者は、學ぶべく異郷に旅行しながら、何時までも學成らず、寧ろ異郷の仇花に戯れて歸郷することを忘れてゐる放浪の旅人にも比すべきであらう。

以上の解釋は人格變化の型を述べたるに過ぎない。現實の人間には全く個人又は分身のみになり切つたものは求め難い。各人にはそれらの兩面があり、これが一人格に於て消長するのである。また個人の始末に就ても西洋と日本とは多少趣を異にする、西洋の個人はヒューマニズムに出發し、デモクラシーによつて固成された。即ち專制の神より離脱した人間が人自身を知り、專制の君より解放された人間が民自身を知り、立法が神權から君權へ、君權から民權へと移つて行つたと言はれるやうに、人民自主を念ずる所に個人が固成したのである。而してこの個人發達にとつて最も大なる推進力となつたものは言ふでもなく交換・流通・貨幣・資本等を内容に持つ社會經濟であつた。然るに我が國にあつては西洋と著しく事情を異にする。我が國にあつては、人の信ずる神にも、

民の奉仕する君にも、專制者を見受けない。従つて、我が國にはヒューマニズムもデモクラシイも孰れも發生すべき地盤がない。最近にデモクラシイを高唱し、ヒューマニズムを提供するものが現はれたが、孰れも他の目的の爲にこれらの思想を利用するものであり、然らざれば洋食を珍しがる田舎人の所行の類である。我等の神觀と君主觀との中には已にヒューマニズムやデモクラシイの長所を了解し得る素質が含まれてゐるから、殊更に人民の名に於て個人性の發展を見ると言ふことは、我等の歴史の知らない所である。我が國民の個人性は主として封建時代の幕府執權及び領主支配の下に生活の安定を得ない境遇によつて培養されて來た。勿論それは社會經濟の發展が促進力となつてゐる。従つて我が國民の個人性は、自ら守る點に於て強く自ら責任を負ふ點に於て弱い。

この點に於て我々は西洋の個人に比べ我が國の個人に大なる遜色あることを認める。私は我が國に於て個人主義を唱へる人々が多くは責任感の強い人々であることより推して、この人々は寧ろ個人として責任を重んぜよと勸告するのではないかと思ふ。但し日本人の個人的責任感の弱いと言ふことは、日本人が責任を重んじないと言ふことにはならぬ。分身的自我性は個人主義者より見れば數々過度と考へられるほどに自我の責任を負ふことがある。分身的責任感の發達が個人的責任感の成熟を妨げてゐるとも言へる。しかしこの妨害は妨害であつて差支ない。否寧ろ日本人は個人性に生きるよりも分身性に生きることが先天的及び後天的特質であると言ひ得るのである。

西洋の個人は日本の個人に比して道德性が高い。然るにその西洋の個人と云へども、今や嚴しい批判の下に置かれ、個人主義を主たる内容とする近代主義は没落の過程をとるさへ言はれる。全體主義は現代の生活主義である。個人の存在は否認され得ない。それはまた抑へられながらも長くその存在を續けるであらう。しかし個性

を尊重し個性に創造力ありと認め、個性の完成を目標とする所の個人主義は、過去に於ても一面の正しさを持つに止まり、將來に向つては嚴重にその時代不適性を指摘されるやうになつた。

「國に生き國に死なばや人として生き榮ゆるは國成せる人」、これが日本の道德であり、日本の眞理である。外國の道德を參考とすることも大切である。國を聯ねる國際生活の道德を守り進めることは更に大切である。而して最も大切なことは我が國の道德を守り進めることである。斯の如きは眞理の求得に就ても同様である。眞理の所在が何處にあるかを尋ねないで、漠然と眞理を追ふ者に、どうして明確な眞理が求め得られようぞ。近代の學問は眞理の主體性を明確にすることが出来なかつた。實踐的研究が目指さす所の正道は勿論のこと、觀照的研究に於いて求められる眞理も亦主體によつて規定されることを主張する所に、現代の學問の時代性が見られる。眞理探究の態度及び方向が場所的・時代的に規定されるのみでなく、眞理そのものにも場所的・時代的の約束がある。殊にこゝに取擧げたる國家論に至つては、外國の科學的眞理を以て世界的普遍の眞理なりと誤信し、これを自國に強要するが如き非學問的迷信は、甚しく世を過まる。かゝる迷信は同時にまた反道德である。